# 第34回 言葉の力――実は言霊考

新年度が始まってひと月経ちました。なんだかんだ言っても自分の言うことを聞いてくれる親から離れ、言うことを聞いてくれるどころか全くわけのわからない人が集まっている中に意味もわからず入っていくという大冒険を園児たちは日々繰り返しています。

そんな新年度、親子の離れぎわの話を二つ。

初めての幼稚園。別れの舞台となる園バス乗車。座席についてバスが出ると、あごを引き、ぎろりと上目づかい、ぐっと涙をこらえるような形相でつぶやいている、「ママもパパも〇〇（妹の名）もきっとさみしくない」。

泣いてしまいそうな心情なのに、この言葉が彼女を持ちこたえさせているようです。「自分が」ではなく「ママもパパも」であるところがおもしろい。デリケートな心の機微があるようです。「私はさびしくない」といったのでは、さびしさがダイレクトに「私」の上にのしかかってしまい、私がさみしいことをあからさまに認めることになる。それでは言葉が、かなしさを乗り越える踏み台ではなく、かなしい重しになってしまう。

「言葉は心を表す。だから大事なのだ」とよく聞きますが、それでは不足。それは、言葉が内面表白の道具だという言語観のあらわれです。言葉って、それどころではありません。

言葉は、何かを連れてくる。実物を宿す。何かを開く。

もう一つの話。

楽しそうに笑ってはしゃいでいた子どもが親と別れてバスに乗り込む。母親に手を振って「ママバイバイ」と声に出したとたん、忽然（こつねん）と顔が曇る。涙あふれんばかりの表情に豹変（ひょうへん）する。するとただちに口を真一文字に結び、あふれそうなさみしさをぐっと押しとどめ、こらえる。そのけなげさは実に人を打つ。

「ママバイバイ」と口を開いて声に出して言った瞬間、何かが開いてしまったのです。そこから何かが漏れ出してしまった。なので、口をぐっと固く結んでこらえたのは、二言目と共に漏れるものをふさいでいるのです。開いたところから入ってくるのは、そちら側にいて笑っていたはずのママ。「ママ」という言葉にママが宿り、声となったら体を出入りするものとなるのです。

言葉とは内にあるものを外に、外にあるものを内に、内と外の垣根を越えて行き来する何者かなのです。なので、内面・外面というものの見方の枠組みを超越する。言い換えると内と外という対立図式ではとらえられないということなのです。

口を開くとか声を出すとかいうことは、たんに口や声だけのことではないのです。

言葉は心と結びつきはするけど、個人の心よりも大きい。心より大きくなければ心を制御できないでしょう。言葉が私のなかを、行き来するのではなく、私が言葉のなかを行き来しているのです。言葉は世界だからです。

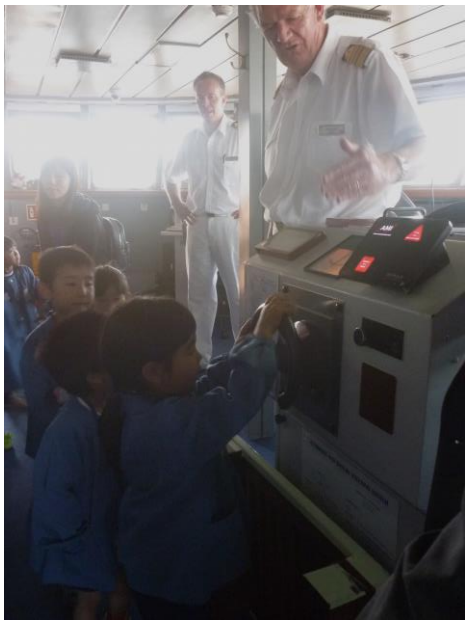
「言葉の力」とは世界の力なのです。

電車も家も三輪車もスマホも言葉によって作られています。経済も法律も科学も、いづれもいづれも、言葉に編み込まれ言葉の刻印を帯びているのです。言葉の網の目の中で、物は存立しています。そういう網の目を世界というです（地理的な、外国という意味ではありません）。

われわれは言葉の海に産み落とされる。その中でうごめきながら言葉を獲得するのですから、思考（考えること）だけでなく、感性（感じること）も言葉に依って成り立ってきます。私たちの経験は言葉に織り込まれて可能になっているのです。

そうだというのに、私たちの社会はあまりに言葉を軽んじていると思うのです。「言葉では言えない」「言葉で言うのは簡単だが」とか平気で言うのです。言葉を信じてないこのご時世、その場しのぎや他者をごまかすための政治家のような言葉ばかりが横行し、責任感や倫理観はつぶれている。だから「規範意識」を振り回しても、言葉と行為のジャストミートで倫理というヒットになるのだから、言葉という球すじを読まない大人は三振王でいてください。「言霊（ことだま）」という「たま」のキャッチボールから始めるといいかな。

桜のもとで遊ぶ



カレドニアン・スカイの寄港を歓迎し、年中年長児が「海」の歌を手話付きで歌って踊り、お客さんも盛り上がりました。船内見学もさせてもらって大喜び！

花まつりでは、初めて未満児さんも本堂にお参りし、全園児、神妙な顔で誕生仏に甘茶をそそいでいました。